

浄瑠璃・時代物

「出世景清」

◎初演 貞享二（一六八五）年 竹本座

「平景清と源頼朝、両雄の対決の果てに」

あらすじ

平家滅亡後、平景清は、源頼朝を討って一族の恨みを晴らす機会をねらっていたが、その前に頼朝の臣で、知略にすぐれた重忠を討つ計略だった（初段）。

熱田大神宮の大宮司は、景清に娘の小野姫を嫁がせ、協力を約束する。清水寺の観世音を信仰する景清はまた、京都清水坂の遊女阿古屋とのあいだに、二人の子どもをもうけていた。阿古屋の兄、伊庭十蔵は景清を捕らえ、恩賞を得ようと妹をそののかす。阿古屋は景清にあてた小野姫の手紙に逆上し、景清のいるところを訴える。景清は危うく難を逃れる（二段）。

重忠は、景清をおびきよせるために、熱田の大宮司や小野姫を捕らえ、六条河原で苦しい目にあわせる。景清は名乗り出て、縄にかかる（三段）。



二人の子どもを連れ戻した阿古屋は、景清のもとへわびに来るが、許してもらえない。このため、阿古屋は景清の面前で、子どもとともに自害する。それを見た景清は牢を破り、通りかかった伊庭十蔵を殺し、再び牢に戻る（四段）。

景清は、佐々木四郎の手で首をはねられるが、そのさらし首は、清水の千手観音の首と変わっていた。頼朝はその仏頭を袖に受け、清水寺に参詣する。頼朝は千手観音に救われた景清を許し、宮崎の庄を与える。

景清は、頼朝をねらい続けたことを恥じ、両眼をえぐり、九州日向に下る（五段）。

見どころ

近松が竹本義太夫のために書き下ろした最初の作品です。義太夫の前途を祝って、題に

「出世」という文字を用いたのかもしれませんが。主人公の景清は、『平家物語』にも登場する実在の人物です。彼が平家復興を願い、頼朝を執念深く追う物語は、後に謡曲や幸若舞、あるいは古い時代の浄瑠璃などに語り継がれてきました。この作品では、近松は先行の作に筋を借りながら、阿古屋、小野姫など、景清をめぐる女性たちの心理を深く追求するなど、これを「史劇」と呼ぶにふさわしい内容までに高めています。そのことから、演劇史の上では、『出世景清』以前の浄瑠璃を「古浄瑠璃」、以後を「当流浄瑠璃」と呼んでいます。